大学と学生〜日本文理大学のキャンパスコミュニケーション

平居孝之
（日本文理大学　学長）

卒業を前に挨拶に来てくれた学生から、「高校生の頃は、都会の大学に入ること、東京で働くことは格好良いと憧れていたのですが、就職活動で東京に出て初めて気がつきました。自分自身の幸せとか、安心感を考えた時、自然に囲まれた環境が自分に合っていると思い、地元に残って就職することにしました。」という決意を聞いた時、私自身、ふと、立ち止まって考えたことがあった。

新幹線を、高速道路をと、都会に追いつけと駆け足で走ってきた地方であったが、現実は、市街地でさえも、商店街とは名ばかりの空き店舗にシャッター通りばかりである。東京から得られる様々な情報は、果たして地方の活性化に応用され、役立ってきたのであろうか。

二人に一人が高等教育を受ける時代になり、多くの大学はエリートの養成機関ではなくなったが、これは、日本の社会が大きく成長した一つの証だと思っている。一方では、少子化と高齢化が進み、若者の力が以前に増して期待されており、より多くの若者に、より質の高い高等教育を授けることは、これからの日本に必ず役立つことである。

そのような中、私立大学は、それぞれの大学の個性となる「建学の精神」に沿った教育で、学生一人ひとりの夢を大切にしながら、どのように人として成長させていくのかが問われており、日本の将来に係わる重責が課せられている。

本学は、一九六七年に創立者が建学の精神「産学一致」を掲げ、大分市に開学し、産業界と同じ視点に立ちその時代のニーズに応える優れた人材を育成してきた。三年前に四〇周年を迎えたが、社会・産業界の状況も大きく変化していることから、「産業界が大学に求めている教育は何か」「今の学生に不足している力は何か」「地域での大学の存在価値は何か」と検討した時、本学の使命は、「地域の産業に活力を与え、地域に元気な人材を送り出す」ということであると考え、人間力教育を打ち出した。

私が学長に就任したのは、その一年後で、人間力教育を実現するために「キャンパスコミュニケーション」という合言葉を掲げ、授業だけではなく、キャンパス全体で人を育てる環境を創りあげたいと考え、教員・職員に強く働きかけた。学力・学習歴・家庭の経済力・国籍・価値観など、多様化した学生を、「産学一致」を具現化した方法で教育し、人格まで創りあげるという大きな挑戦である。研究一筋で来た私にとっても、多くの教員にとっても、専門分野以外で、一人の人間として学生と向き合い、生き方を導く教育は、毎日が真剣勝負で、教職員側も気づきと反省の連続である。

五年先でさえ不透明で目的が持てないような時代に生きて行かなければいけない若者の立場に立って考えた時、学ぶ意欲が働く意欲と生きる意欲に繋がるという信念のもと、学生に確かに生を実感させ、物事を成し遂げる達成感を味あわせてやりたいと願い、教職員全員で人間力教育に関わっている。

ようやく、人間力教育も高い評価を受けるようになり、本学の人材育成の考え方に賛同していただく企業や地域の方々も増え、実社会の中で実践教育の場を提供していただいていることは、大変有難い。企業や地域との連携で、チームで働くことを常に意識させる学部横断ワークショップ型授業の「社会参画」が本学の特徴のひとつであり、九州で唯一の経済産業省・社会人基礎力のモデル校にもなり、教育成果も徐々に表れてきたと実感している。

地方であっても情報は瞬時に手元に入ってくる時代で、情報を持つことで自分たちは大人にも勝り、あたかも社会を動かしているような気になって満足しているような若者が増えている。そのような若者に対して、学生時代に企画したことはそうそう上手く行くものでないということを体験させ、社会に通用するレベルまで考える力を高め、実践段階まで導くことは、大きな労力と熱意が必要である。

そこには、企業との交渉役や、学生とのジェネレーションギャップを少しでも縮める調整役が必要になってくる。その重要な役割を中心に担ってくれているのが、比較的、柔軟な考えを持っている若手教職員である。ダブルティーチング制を取る科目があり、教員と共に指導する職員は異なる部署から兼務という形をとっており、なるべく部署間の壁を低くし、大学人として教育と学生支援の両面からサポートしている。

今年度から一年生対象の正課外科目を新しく設定し、職員が中心になり、様々なプログラムを企画している。これは、毎年、学生との年齢差が広がる教職員が、学生の気質をできるだけ早く知ることができるメリットがあり、学生との距離を適度に保ちながら、学生生活の不安を取り除き、さらに学生との信頼関係を構築するためである。

さらに、全ての学生に担任制を充実し、責任の強化を図った。

個々の学生の授業の出席状況や成績だけではなく、部活動の指導記録や個人面談会での保護者の面談記録、社会参画のグループワークでの成長、就職活動の進捗状況などのデータをリアルタイムで教職員が共有できるシステムを構築させた。

これらの積み重ねによって、学部の壁、教職員間の壁、大学と学生の壁が低くなり、人間力教育のための土台づくりである「キャンパスコミュニケーション」も教職員全員に浸透してきた。

最後に、今後の展望について述べてみたい。

大分県が一九六二年に制定した新産業都市建設促進法により工業開発拠点に指定され、地域から技術者養成の要望があって、本学は工業大学としてスタートした。昨今は、環境・エネルギー問題など、特に学生の就職

先となっていた製造業に大きな課題が突きつけられていることもあり、工学部の改革を模索している。

五年前に文部科学省私立大学ハイテク・リサーチ・センター整備事業に採択され、昆虫型超小型飛翔ロボットの研究開発がきっかけになり、トンボの飛翔能力の素晴らしさを分析した。従来の航空宇宙工学では、重い物体を、速く、効率よく飛ばせることを目標にしてきたが、その逆を行くマイクロ・低速の世界でトンボは生きており、飛行機の世界では嫌われ者である空気の渦を上手く利用しているという事が分かった。その原理が、マイクロエコ風車に応用された。この風車は、そよ風でも暴風でも安定した回転で発電し、柔軟性の翼を使うので危険性が極めて低く、小型で汎用性に優れていることが実験で確かめられた。

近い将来に、マイクロエコ風車が製品化して、社会の課題に応えることができるという期待を抱き、他学科の教員も集まり、互いの学問領域を越えたキャンパスコミュニケーションのチャンスも増え、地方の私立大学からでも、世の中の価値観を変えるようなサプライズを提供できると考えている。

大分県には、森里海の連環を実感できる自然環境が整い、自然の知恵や生命の進化を、総合的に、バランス良く、学べる環境がある。

私たちは、人間中心に創りあげてきた社会に様々な課題があることを踏まえ、地域社会のリーダーの育成と市民教育に、企業、行政、地域、メディアの方々とともに挑戦している。